

# 臨床社会学の方法

## (12) プランド・ハプンスタンス

### —計画された偶発性—

中村正

#### 1. ある社会人院生の研究—ユニークな「問い」

この道30年になるベテラン精神科訪問看護師が社会人院生として自らの実践を省察して論文にした。彼女の問いは「うまくいった訪問看護はどうしてなのか」というものだった。これを明確にしたいと考え、カルテのようにではない自らのノートに記していた私的な記録をもとにして訪問看護の全体についてじっくりと振り返りながらこの問いに答えていく計画をたてた。その私的な記録には生活に関わる訪問看護師らしい着眼点が満載だった。医療の枠をもちつつも、それを超える関係性の取り方に専門家の腕が光っていた。

たとえば、なかなか看護師に会ってくれない患者とのコミュニケーションをとる工夫は電気メーターから始まった。何度訪問しても玄関を開けてくれない。ひきこもり気味だという患者の記録から中にいる気配を感じる。さてどうしたものか。最初はこんなものかとあきらめずに気長に訪問を繰り返す。しかし

それでも安否は確認したい。そこで電気メーターが回転している様子を確認し、安心して帰ることとした。「面会不能」だったが自らの備忘録にはこうしたメモがたくさん残っていく。彼女はこれを一種のバイタルサインと名付けた。バイタルチェックはできないので考案した実践の知である。電気メーターというライフラインをとおして生きていることの確認ができる。

この話のオチはその電気メーターが電力自由化の影響で、ぐるぐる回るというわかりやすいものからデジタル式に変わり、生きているという実感がないものへと変化していったということだ。ある日突然出現したスマートメーターに看護師はあたふたする。こうした微細なことに社会の動態が映し出される。便利なようなデジタルによる集中管理はこうしたアナログな相互作用の壁を崩していく。

しかし努力の甲斐あって、首尾良く玄関が開かれていく。もちろんその後も苦労が続く。その記録は一個の小説のように奇想天外なものであり、二人がやりとりしながら構築した

現実でもある。「事実が小説より奇なり」の論文にしががった。その患者さんは高齢であったので最後は適切な高齢者介護施設への入所となった。

もちろん論文なので、概念が欲しい。整序していく必要があるからだ。しかし通例の学術論文の様式にするとこの記録は死んでしまう。講演しながらもう一人の自分が筋書きをナレーションしつつ見直しているような「メタ物語」風の分析的な声が随時挿入されていくかたちの論文に仕上がった。ポイントは「看護の知」とは何かである。実践の知であり暗黙の知であるが、自問自答的な省察をとおして、概念と分析が生成し、個性的な患者との生きる場におけるやり取りの仕方（実践のやり方）が浮かび上がる。

抽象的な看護理論をもとにして、その前提が真であれば結論も真であると仮定して実証する演繹という方法でもなく、また事例や個別性をもとにして一般性を導く帰納という方法でもないもう一つの推論、「アブダクションabduction」のやり方である。個別の出来事をより適切に説明することのできる言明（仮説）を導こうとする思考の方法である。発想や直感、想像的思考、臨床実践等を考察する際にとっても大切な論理的推論方法である（これ自体は別にキーワードとして取り上げることとしたい）。

## 2. ブランド・ハプスタンスの考え方

カルテのようにない記録は訪問看護師の智恵とアイデアの宝庫である。何かを創造する原石のようだった。そこから見えないものを見ていく作業を行う。あるいは見ているが気づかれていないものを掘り起こしていく

作業のようでもあった。アブダクションである。いつも発見があった。

手がかりにした研究方法はいくつかある。指導担当者という役の伴走者としての私の内言のようなものでもあった。現象学的看護事例分析、臨床の知についての理論、エスノメソドロジー（会話を含む日常的実践の分析）、マイクロ・エスノグラフィー（微視的な過程の観察）等の研究手法についてのアドバイスとともに、訪問看護とは何かについての基本的なものの見方が大切なように思い、いつも基本となる問いかけをしていた。

さらに訪問看護記録を一つの物語に編んでいくための思考の補助線のように作用した言葉の一つがブランド・ハプスタンス（計画された偶発性）である。米国のスタンフォード大学、教育学・心理学教授であるクランボルツによるキャリア論である（『その幸運は偶然ではないんです！』J.D. クランボルツ他、ダイヤモンド社、2005年）。

ブランド・ハプスタンス理論は、個人のキャリアの8割は予期しない偶然の出来事の連続を一つにつないでいく諸力によって形成されるというアプローチである。偶然は、意識や努力によって、新たな機会へと発展させることができるという。

ブランド・ハプスタンス理論は通例のキャリア論を批判的にみている。一般に、キャリアは意図的で計画的に築いていく動機によって導かれていくとする理論が主流である。目的に従って合理的に努力する道程としてのキャリア形成という考え方である。いわば直線的な発展モデルである。

しかし、現代社会は予定調和ではない。変化の激しい時代である。予期しない出来事に遭遇する。絶えず選択をしながら、ある状況

のなかを生きていく。進路変更の連続であり、問題解決に迫られながら、物語を後からつくっていく。学習機会ともなり、行動しながらキャリアを形成することになる。変化への対応力、修正しながら軌道を描くこと、それを学習移転しながら次の状況で対応する力へと展開していくこと、さらにそれを後からひとつの物語として意味づけていくことができる過程を表す概念である。次の5点がここで作用している力だと指摘されている。

①好奇心 **Curiosity** (新しい学習機会を模索し、知らないことや関心外のことに関与していく姿勢)、②持続性 **Persistence** (努力し続けること。首尾良くいかなくても継続していくこと)、③楽観性 **Optimism** (予期せぬ、期待とは異なる結果についても受け入れること)、④柔軟性 **Flexibility** (常識にこだわらないこと、先入観を廃すること、オープンマインドな態度で接すること)、⑤リスク・テイキング **Risk-taking** (不確定な結果や失敗を次の学習の機会と捉えること) である。

彼女の実践にはこれらの特徴がすべて垣間見える。「うまくいった訪問看護はどうしてなのか」という問いに対しては、もちろんうまくいくまで工夫を重ねているからうまくいくのだが、それでは説明したことにならないのでこうした思考の手がかりを使って解釈をくわえていく。

その試行錯誤は訪問看護の理論に基づくというよりは偶然担当した患者の生きる地域と生活の場と状況から構成されていくものであり、相互作用の過程をとおして絞り出されていく、智恵ある看護師の職人的な技である。暗黙知として作用する見えない能力として蓄積されていた。看護理論では習わない非認知的な能力が上記諸点である。これは関わる当

事者のもつ非認知的能力との呼応関係でもある。

この能力はいろんな分野で関心をもたれている。たとえば「マシュマロ・テスト」が有名だ。幼児を対象にして目の前のマシュマロに手を出すのをがまんすることができる子どもの将来を調査したものだ。非認知的な能力のひとつである自己コントロールを変数にして追跡調査が展開された(『マシュマロ・テスト:成功する子、しない子』ウォルター・ミシェル、早川書房、2015年)。

また別の例として、大学にはGPAという試験の成績の平均値を出す仕組みがあるが学生の能力の知的な部分しか評価できていない。キャンパス文化、学生文化という隠れたカリキュラムをとおして得られる能力と知的な学業成績の関係はまだ未知数である。

### 3. 非認知的領域のことも含めて

対人援助職者がプラント・ハプスタンスとして取り出せる実践知や暗黙知をもっているとしたら、対象となる当事者はプラント・ハプスタンスのなかを生きていくといえる。もっと無自覚的であり、大変な事態や状況のなかを生きていて、それらと何とか苦闘し、対峙している人たちだと考えることができる。

たとえば、逸脱行動や問題行動の当事者たちは、その行動過程をみると、そうした行動へと吸い寄せられるような過程があり、その都度、分岐点に立ち、どちらかといえば問題行動へと至る道を選択して生きていくようにみえる。そうではない行動へと至る選択肢がない、あるいは少なく、問題解決の方策や資源も稀少で、周囲の対人関係も支援的ではなかった等という状況をみることもできる。生

きる過程で実践してきた習慣、対人関係の取り方、社会制度への対応、感情の処理の仕方、社会資源の保持具合、その行動による欲求の充足のさせ方、そしてそれらを一つに統合していくパーソナリティの構成の仕方の総体がある。その選択された行動は偶然というよりも予定されたようにその人に降りかかる。対人援助実践者の暗黙知と同様に、逸脱行動や問題行動として発現させているその暗黙の知が取り出せるようだ。この連載、「臨床社会学の方法」の第1回目で言及した「暗黙理論」は別の言い方である。

問題行動に関係する心理臨床ではこの「暗黙理論」を重視する。代表的には、認知行動療法があり、介入し、変容すべき対象を「認知の歪み」*cognitive distortion*とする。認知行動療法は、当事者のもつ「白黒思考」や「べき思考」等を取りだす。それらを変化の対象にし、認知再構成を支援する。

もちろんそうであったとしても、「認知の歪み」という定義よりは「個人の理論」とした方が、とくに暴力臨床で取り組む場合は当人の主体性や回復への努力が見えやすいと私は考える。「認知の歪み」としてだけ定式化しない方がよい。そうではない言い方も考慮して当事者との対話を試みている。

なぜなら、「歪み」という表現に対しては「正しい認知」「適切な認知」が想定されることになり、さらに誰がそうした歪みを判定するのか、それはたんに矯正の対象として浮かび上がるだけではないか等の疑問が生じるからである。

第1回目の「臨床社会学の方法」に記した「暗黙理論」でも紹介したニュージーランドの司法臨床心理学者、トニー・ワードは、犯罪者の更生保護の理論や臨床心理の領域で同

じような観点から、「暗黙理論」として「認知の歪み」を位置づけるべきことを提案している。歪みという定義だけだと加害者のリスクばかりに焦点があたるからという理由である。

たとえば性犯罪者の「暗黙理論」をとりだし、加害者更生の対象にすべきことを指摘している。子どもらしい行動が性犯罪者の認知の仕方では別様に意味づけられていく。たとえば、人の膝の上に座る、下着をみせて遊ぶ、加害者に抱きつく等の行動が性的に解釈される。子どもが泣くことでさえそれは子どもが関心をもって欲しいという願望であると解釈されることがある。加害者の隣に座ることは愛着をもとめている行為だと意味づけられていく。子どもが私を誘惑した、セックスを望んでいた、子どもは傷ついていない、子どもは性を探索している等として子どもの自然な振る舞いが都合のよいように解釈されていく。女性のフレンドリーさは性的な欲望があるものとして意味づけられていく。

また、子どもが多くいる環境も好む。子どもに関わるボランティアを好む加害者もいる。そのような環境を組織して生きている。

同じ類型の意識としては、性犯罪者の意識のなかに「ナンパして一緒になる時間をもったのだから強引なセックスは合意のうえだ。」があり、だから自らの責任はないといいはることがある。

こうして、特定の子どもの女性像をもって日常の接触が行われ、犯罪へと展開されていく様子を「暗黙理論」にもとづく日常実践としてワードは描き、そこで満たされている欲望の内容とその実現手段の逸脱性の関連を分析し、両者が乖離しているのも、より適切で

健康的な手段を選択することへの支援を暴力臨床として想定している。

こうして、「暗黙理論」が台本のようにして作用し、行動を導いていると想定する。「暗黙理論」はその暴力、逸脱行動、問題行動が偶然ではなく当事者のプランド・ハプスタンスとなっていることを説明している。また、「臨床社会学の方法」第22号で記した「マトリックス」はそうしたプランド・ハプスタンスが生成する「図」の部分にあたる。蜘蛛の巣のようにしてプランド・ハプスタンスは問題行動の渦中の当事者を拘束し、当事者もそこに生きることを余儀なくされている悪循環をみる。

こうして問題行動や逸脱行動として表現する人たちはその問題を呼び寄せるように生きているといえるだろう。暴力臨床をしているとその暴力や行動は偶然ではない様相がみえてくる。そのことへの自覚が暴力臨床の第1歩となる。問題解決からの疎外、問題解決力の貧困、問題を必要として生きている様子があるからだ。

さらにイメージや意味づけも加わる。自らの欲望を肯定し、問題行動を中和するような想像をし、意味づけを行っている。「暗黙理論」はこうした非認知的な部分も含むので、たんに認知的なことだけではない対象をみるべきだ。自らの生活や人生における意味づけが妄想や理想として観念化され、行動を駆動する。そして感情的な満足を得る。プランド・ハプスタンスはキャリアについてのポジティブな概念だが、逸脱的キャリアの構成にも応用できる。

#### 4. 家族のプランド・ハプスタンス—「家族は小説より奇なり」

対人援助職者であれ当事者であれ、個人のプランド・ハプスタンスはさらに対人関係のなかで錯綜していく。なかでも家族(家族類似的な関係として親密な関係性も含む)は「わたしとあなた」という二人称の関係が錯綜する場であり、相互に構築するプランド・ハプスタンスがある。

家族のプランド・ハプスタンスは、「家族は小説より奇なり」の状況をつくりだす。家族が営む日々の現実、学問の言葉よりも、芸術の描写が優れているし、家族を主題にした小説、映画、ドラマ、漫画、演劇が数多いことから理解できるだろう。芸術の家族表象は、臨床の言葉と相性がいい。「臨床家族芸術」論として知見を積み上げて生きたいと密かに目論んでもいる。

実際の家族問題の現実には複雑で、輪郭の明瞭な定義である不登校・ひきこもり、虐待やDV、認知症や発達障害の介護や介助の課題が主題となるが、現実には複雑に問題化する。消費生活、相続問題、貧困と格差の拡大、離婚と再婚の繰り返し、その連れ子との相性が悪いこと、親のギャンブルやアルコール、薬物への依存と生活の乱れ、家庭内離婚状況、逆ギレした妻の復讐等として、ドラマのように浮かび上がる。

こうした「家族の現在形」は常に「羅生門的現実」をつくる。家族は親密な関係性のなかを生きており、習慣となる行動のかたちをつくる。求めあつて成り立つカップルは共生体のようにシンクロする。子どもはそこで社会化されていき、全体として家族構成員は、習慣となった実践共同体をつくり、独自の問

題解決の方法を身につける。

家族は生き物なので人生の出来事が交差するごとに葛藤や苦難が生じ、家族はそれぞれに物語をつくる。中心には親密な関係性(だと相互に思いこむことも含めて)の物語がある。親密であるが故の「病みと闇」が存在する。日本社会で家族は、多様な社会問題への対応を期待されている安全基地のようであるからだ。教育や子育てと介護、衣食住の基本生活の場所、精神的な愛着の場等として社会の基層のように観念される。

しかしその基層に宿る事柄が暴かれた。そこから虐待と DV が劈開されていく。以前とは異なる暴力への介入が家族を開いていく。離婚や子どもの親権をめぐるストーキングや誘拐、離婚と親権問題・財産分与の争い、家出、ひきこもり、親離れや子離れ等の葛藤は、暴力の様相も呈して、家族問題を構成する。家族関係の危機や病理という物語として現前化する。もちろんその暴力を表面化させたり、隠蔽したりするストーリーは社会のもつ人権や社会問題の認識の仕方にかかわる物語構造の反映である。

いずれにしても家族というフィルターをとおして意味が生成し、隠され、定義される。人生の揉め事の多くは家族の出来事として組成され、問題を解決することにも、逆に防波となることも、そしてまた緩和することもあり、増幅することもある。変圧装置のようだ。

こうした葛藤が家族関係をとおして表現される。親密な関係性にある者同士なので、相互に傷つけあう(と観念される)こともあり、その思いこみは「家族心理的外傷」のように観念される。

## 5. 家族的不安をもたらす「体感治安」という表現とそれを生起させる社会の諸力

私は暴力臨床の領域で実践を行っている。そこには家族関係が濃厚に反映される。もちろん、マクロにみても、少子高齢化等、家族のかたちは激変とでも言える渦中にあり、格差や貧困の拡大についての現実的なリスクも横目にみながら、個々の家族は生き抜く戦略をもち、自らの欲望をもとにして動く。家族は内側にリスクを含むこともあるし、逆に、外的なリスクの防波堤となることを期待される二面性を持つ。

そのリスクは不安の予期といえる。家族の相において不安が顕現するので、それは家族不安となる。揉め事の内容は、歴史的には、質的にそう変わるわけでもない家族間葛藤であるが、個人主義の台頭、親族関係の変化、コミュニティの衰退、家族の孤立、母への育児の押しつけとともに、家族問題の解決力の衰退をもたらし、しかもそれに変わる別のかたちの問題解決の制度と技法が未形成なこともあり、社会全体として家族不安を高めていく。

このことの不幸の連鎖を体験した。2003 年頃に内閣府が社会意識調査で用いた「体感治安」という言葉だった。奇妙な言葉だと思っていたら、その後、「安心・安全」という言葉として流通し、各地で「生活安全条例」が制定されていくことになる。その契機にいろいろな事件が組み込まれていくが、それが私の身近で事件として発生した。「奈良・入川さん事件」である。

奈良県に住む知人の夫が逮捕された。彼は熱心な大学の教師で、PTA の活動にも積極的、近所の子どもたちにも「がんばれよ」「気をつ

けて」等と声をかけていた。そんな時、2004年に「奈良女児誘拐殺人事件」が起き、それ以後、地元ではあちこちに監視カメラがつけられるようになった。

ある日、彼がいつものように子どもたちを見ていると、ふらふらと国道に出てしまいそうな小さな子を見かけたので、「あぶない！」と声をかけた。すると、それを見ていた女性が彼を誘拐犯だと思い込んで通報した。寒い日であったのでその時の格好も災いした(目出帽子をかぶっていたという)。彼は任意同行に応じ、自白を強要され、脅迫罪で逮捕された。大学での講義ももてなくなり、裁判で冤罪と認められるまでに一年かかった。当時、その殺人事件のこともあり、むやみに子どもに声をかけないようという主旨で不審者を排除するための「声かけ防止条例」ができており、彼は条例違反をしたことになったのだ。

こうした条例のもとになったものが先に指摘した「体感治安」という言葉である。「体感治安」が悪化しているから、「安心安全条例」をつくり、よその子に声をかけず、家族で子どもを守っていきなさいというものだ。その流れは今も変わらず、そのために地域がもっていた人間関係力が衰退してしまった。

「体感治安」とは、実際の安全や危険ではなく「感じる」もの、つまり極めて主観的なものである。それが制度や政策を動かしている。それによって地域内の人間関係が寸断され、「余計なお世話」をする人が犯罪者にされてしまう。つくられた不安や恐怖が現実を構築している。安心を強調する社会ではそのシャドー(影)として絶えず不安が作りだされる。不安は実態をとまなうことなく一人歩きする。仮想的な不安の種が創出される。それは憎悪へと昂じていきがちだ。憎悪は人々

が脅威と感じる意識から養分を得ている。その憎悪は排外や排除と結びつきやすく、恐怖心が作りだされる。安全な社会であればあるほど些細なことに敏感になり、不安意識が先行する。

疑心暗鬼と相互に監視しあうことが奨励されていく過程における象徴的な事件であった。起こるべくして起こった事件、つまりプランド・ハプスタンスだといえる。こうしてプランド・ハプスタンスは、単なる偶然ではなく、その社会のもつ相互作用と関係性に関わるマイナスの傾向が社会的諸力として作用し、個人へとふりかかることも示す。

#### 6. 家族のプランド・ハプスタンスを構成する社会的諸力—その5つの特徴

家族が遭遇するプランド・ハプスタンスは複数の構成員から成る錯綜となる。家族は社会制度なのでプランド・ハプスタンスは社会的諸力の影響を受ける。その諸力の傾向をいくつか列記しておこう。

第1に、「教育家族」という特徴がある。団塊世代以降の親たちは子どもたちに高等教育を受けさせた。その前の世代は高等教育への進学率がまだ低く、「教育ゼロ世代」(高等教育を受けていない親世代)と呼ばれる。だから余計に子どもに高等教育を受けさせることに熱心だった。その世代が今度は子どもを持ち、大学に通わせる。「教育第1世代」という。さらにその子どもは「教育第2世代」となる。戦後の3世代をかけて、教育の世代交代が進んだ。上の世代の教育や学校への関心は高まる。クレームをつけ、監視するという行動も増えてくるはずだ。

また、1980年代以降、持続的に不登校にな

る子どもが現れ、背後にあるいじめも散見され、加えて、その後も継続してひきこもり現象が指摘されたことも重なり、家族は子育てを基軸にして、子の成長とともに教育ゼロ世代では想定できなかったようなわが子の行く末の不安を抱えるようになる。もちろん教育をとおした階層の上昇移動に期待をかけたことも駆動力となり、家族が子どもと教育を中心に運営されるという意味で、これを「教育家族」と呼ぶ。その「教育家族」の原動力は、たえず業績的価値原理において機能し、その成果が首尾よく達成できないリスクもあり、不安定さを抱えることとなる。家族不安は構造的となる(「奈良県医師宅母子3人放火殺人事件(2006年)」等が典型的)。なぜなら「教育家族」は、すべての人が到達できるわけではないピラミッド型組織の上部を目ざそうとするからだ。

第2に、「ケアする家族」が登場した。育児と介護が家族依存になっている日本の特徴である。子どもが不登校になり、ひきこもりがあれば家族がなんとかかすべく動く。非行に走る子ども、薬物を使用した家族ができれば責められ、非難され、時には引越す等、排除されることもある。広い意味でのケアを期待される家族という意味である。家族の福祉的機能の一環として観念されやすく家族の責任としても位置づけられる。

しかし事態は逆で、ケアニーズの顕在化をとおして家族関係の脆弱さが目立つ。期待される程にケア役割を発揮できる家族ばかりではない。

またケアは感情的な人間関係を伴い、陰性感情や陽性感情に付随する葛藤が生成する。家族は感情共同体である。その中心にはこうしたケアしあう関係がある。ケア行為は、プ

ライバシーやパーソナルな領域を超えて相互作用する営みであり、相互信頼が不可欠な関係である。

他方では、コントロールという事態も生起する。うまくいかない状況では相手に対する否定的な処罰的感情である陰性感情も生成し、時には憎しみへと至ることもある。そこを起点に暴力が誘発される可能性が高まる。

家庭内暴力問題は「関係性の病」の典型としてみることができる。家庭内暴力は、家族ならびに家族的類似性をもつ集団や特定の二者関係において発生する。その中心にあるのは、親密な関係性・非対称な関係性という特質であり、それが葛藤を経て、暴力へと至るような脆弱性 *vulnerability* (虐待誘発性) を宿すことになる。ケアする家族の持つ脆弱性をもとにして家族不安が生じる。

第3に、問題行動や逸脱行動に伴い「責任をとる家族」が前景化しつつある。自己責任論が根強くあり、加害者家族には排除の力が働く。あるいはいじめや体罰を告発するには勇気がいる程に学校化社会は被害者家族を圍繞している。これは家族的責任論といえるだろう。子どもの非行は親の責任という風潮もある。この考え方は、国際的なものともいえる。イギリスでは犯罪を起こした少年の親も処罰や賠償責任を負うべきという考えが広まり、具体的に政策化されてきた。個人主義だけではなく、家族責任が強調され始めている。自己責任論の延長にある家族的責任論である。各種の解体的事態(=アノミー的状況)、たとえば、離婚の増加、非行の増加、嫉の欠如、傍若無人な若者たちの現実が家族の無責任さ示唆する事態だとされる。

第4に、ここにジェンダー作用が加味される。父性の欠落があり、今こそ家族の絆の強

化、そして父性の充填が必要であるという。日本社会でいえば、思春期、青春期暴力、非行、その予兆としての「子どもたちの荒れ」が目立つ状況と家族的無責任(母性欠如と父親不在)が重なり合って、強い絆、厳格な規範、強力なリーダーシップの必要性とかかわり父性の強調がなされる。福祉国家の再編と関わる新自由主義的な政策動向の焦点に父親の責任が奇妙かかたちで位置づく。責任ある父親をめぐる子どものしつけから非行防止まで、親の責任が強調される。男女共同参加へのバッシングともなり、いきすぎた平等批判も見られるようになる。

第5に、「心理化する社会」を家族は生きている。心的外傷が「家族心理的外傷」という相において感受されるような観念が、俗流化した臨床心理や精神医学の言葉において人々の意識をとらえている。小学生さえもトラウマという言葉は何気なく使うような事態に示されている心理化社会はつとに指摘されているが、そこに「家族心理的外傷」という観念が覆っていることも見逃せない。家族中心社会 *family-centered society* では当然のことであるが、社会が押しつける個人の苦難や生きづらさが家族関係に環流して意味づけされていく。母娘関係、親への恨みや子どもへの叱咤、家族への八つ当たり等は日常茶飯事で、親密な関係性であるがゆえの不幸を生み出す人間関係の典型として家族が位置づく。

家族問題は社会の動態を反映する。家族のプラント・ハプスタンスはそれが問題の重層化になるリスクもはらみつつ、葛藤を乗り越えようとする努力をもひきだす。その際に、当該の家族だけで問題を解決できるわけではないので、家族をめぐる社会の関係性が大切となる。ここに列記した5つの社会的傾向は

家族を孤立させるようにも機能し、プラント・ハプスタンスが家族問題へと転じていくリスクとして作用する。

#### 7. 異なる関係性と相互作用を見いだすーアロマザリング、アロケアリングに学ぶこと

家族のプラント・ハプスタンスをよりよい方へと転じていくには家族を取り巻く関係性が鍵となる。阪神淡路大震災や東日本複合大震災後に「災害ユートピア」を体験した。新しい絆の感覚だった。こうした被災体験は、同時代体験のなかでも心理的連帯感を得ることのできるものだ。NPOも含めた新しい絆の形成に社会の関心が向かう。

私は「絆に敏感な世代=連帯新世代」だと考え、多様なNPO活動の推進に努力してきた。つながりの意識の醸成は、NGOやNPO、社会的起業への関心、新しい生活の仕方の意識等として現象している。絆の新感覚は、家族にだけ還元されないような親密な関係性への関心ともいえる。共有できる関心を基にした社会的な縁としての関係性の多様な創出という方向性であろう。地域の子育てサークル、悩みや苦勞を共にする当事者組織、ネットでつながる関係、多様な形態のシェアを試みる取り組み等があり、こうした組織のかたちは今後も重要な機能を果たし、不安を解消していく手がかりとなるだろう。

こうした変化を見据えつつ、家族の諸困難に示唆されている、新しい関係性に向かう手がかりを家族問題のなかに探り、それを社会において必要なサービスと支援のあり方として指示する方へと「翻訳」する責任が専門家や研究者にはあると思う。私にできる実践は家庭内暴力をめぐる家族のやり直し支援や男

性の脱暴力支援である。家族にかかわる臨床はその変化を察知するセンサーのようであり、それを社会の課題として「翻訳」して伝える仕事があり、社会的役割だと思っている。私はこれを権利擁護のための専門家 **advocacy oriented professionals** と呼んでいる。

「絆に敏感な世代」を支援するための例示であるが、家族関係でみると、少子化を念頭に置いた「斜めの関係」の創出という課題がある。私の両親の世代はきょうだいが多かったため、必然的におじやおばが多かった。つまり、親子という「縦の関係」ではない「斜めの関係」をもつことができた。たまに会うと、おじやおばが「お前の親父は偉そうにしとるけど、小さい時はこんなんやったで」と冗談めかして言う。そうすると子どもは、親を尊敬する反面、相対化して見ることもできた。

しかし、次第に家庭の子どもの数は減り始め、現在も続いている。そのため、今の子どもたちは「斜めの関係」をつくることがむずかしくなり、家族だけで閉じてしまっている。「斜めの関係」を別の形でつくることが重要となる。地域の子育て支援はその典型である。その翻訳する課題のひとつを中国からの留学生の研究課題とともに意識した。

一人っ子政策のもとでの家族の変化を研究したいという四川省出身の彼は、地元に戻って子育て現役中の母親にインタビュー調査を試みた。2015年11月、中国は一人っ子政策を廃止し、二人まで子どもをもつことができる政策へと変化をさせた。それでも中国の家族のかかえる課題の本質は変わらないという主張となった。その過程で、アロマザリング **allo-mothering** という言葉の大切さについて検討した。母親以外の人たちの関与する母性

的養育のことで霊長類に見られる共同養育の仕方のことである。

母親だけに育児の負担を負わせないために、広く社会が養育を保障する仕組みをつくる際の理論的な支柱となるコンセプトがアロマザリングである。どこの社会でもアロマザリングがある。

しかし近代社会は家族を孤立させ、ジェンダー作用をとおして育児を女性に負担させる。ペアレンティングだけだとこの構造に巻き込まれる。すくなくともアロマザリングとセットでペアレンティングを位置づける必要がある。子ども虐待と高齢者虐待で家族のやり直しをすすめる際にもこの区別と連環、そして父親の位置付け方、家族のやり直しの際の大家族の活用、保育所や学校、仲間集団や親のつながり等、アロマザリングと試みていくといろんなものが関連していく。この点での基礎的条件づくりこそが家族問題対応力となっていくだろう。

家族問題は、家族のブランド・ハプンスタンスが不幸の重なりや課題の呼び寄せのように作用して生成する。そこには家族に負荷をかける問題解決の仕方があり、社会が家族依存に陥っている様相がある。社会問題の重層化である。

家族をとおして負の連鎖が層を成していく。子どもの貧困には母子家庭問題がつかまとう。離婚の原因には父親の暴力問題がある。こうした問題連鎖はブランド・ハプンスタンスそのものである。その過程がブランド・ハプンスタンスの経過をみることで可視化される。訪問看護師のブランド・ハプンスタンスは当事者の問題の重層化というリスクとなるブランド・ハプンスタンスと並行して、それが悪循環にならないような支援的な関与となって

いた。

こうしたことは彼女が習ってきた教科書には書かれていないことだった。臨床の知はこのプラント・ハプスタンスそのものだろう。訪問看護師の対象者は育児ではないので、アロケアリングという。他者の存在の大きさを表現したものがアロマザリング、アロケアリングである。看護師のプラント・ハプスタンスと当事者のプラント・ハプスタンスは地域訪問看護として交差した。訪問看護の知は小説よりも独自のものだった。

なかむら ただし

(臨床社会学、社会病理学、社会臨床論)